



## を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

**第** 二次大戦終了まで、日本の中等教育では「作法」が教えられていた。「作法」の教科書は明治の終わりに文部省により、全国各地の作法を調査したうえで、識者たちによってまとめられた「作法要項」である。本書はその「作法要項」についての研究成果を上梓したものである。

**唐** 突ですが、皆さんはナイフとフォークでカツライスなどのお皿のライスを食べるとき、どうやって食べますか。私は左手のフォークの裏側、山形になった方にライスを盛って食べる慣わしです。大学時代にある会合で、民青のお姉さんに教えてもらって以来です。しかしなんとなく違和感をもっていました。ところがその作法の発信源が「作法要項」の第十四「食事」の「西洋料理の食べ方」に存在することが、この本を読んでわかったのです。そうか、あれは明治の正しい作法だったのだ。

**そ** れはともかく「小学校作法教授要項」には次の18項が登場する。  
**第** 一 居常ノ心得。第二 姿勢。第三 起坐。第四 敬礼。第五 歩行。第六 戸障子ノ開閉。第七 言語應對。第八 訪問迎接。第九 祝賀、

見舞、弔問、会葬、家例及祭忌。第十 招待。第十一 告送別及送迎。第十二 進物。第十三 授受進撤。第十四 食事。第十五 集会。第十六 祝祭日ニ関スル心得。第十七 船車ニ関スル心得。第十八 物品ノ貸借。

**例** えば第三 起坐である。椅子への座り方の作法。まず椅子の左側に両足を揃えて立って静止する。動作の前にいったん静止するのが日本人の作法。次に左足を一步進め（左優先も日本の作法）、右足を椅子の前にもってきて左足を寄せ、椅子の前で一旦静止、そして静かに腰を下ろす。もちろん姿勢正しく。

**た** かが椅子に腰を下ろすだけで、なぜこんなに細かく作法を決めなくてはならぬのか、と笑ってしまったのだが、試しに自分でやってみるとこれが実にいい。作法に従って行動すると、自分が正しい人間になったような気になるのである。それに外目にも美しく見えるであろうと思えてくる。

**こ** の本に出てくる姿勢、起座、敬礼、歩行などの例に従って試してみたのだが、不思議にいずれも晴れ晴れとした快感が味わえる。身体動作と心機の不思議な調和を味わうのである。そうか、戦前まではこういう作法で子供たちは躰を受けていたのだ、と改めて感慨をもよおす。

**こ** んな風にこの本について書くと、多分「真理・道徳・共同体」を目の仇にする、ポストモダン派の人々から嘲笑されるかも知れないが、私の実感でありこの実感の深奥に、今注目しなければならない何物かが潜んでいるように思えるのである。

**本** 書に登場する作法の条文の幾つかを以下に挙げておく。

- ・起床シタルトキハ口ヲ嗽ギ清メ顔ヲ洗ウベシ
- ・尊長（目上の人）ヲ案内スル場合ハ少シク先キニ行クベシ
- ・客ノ帰りタル後間モナク大声ニ談話スベカラズ
- ・老人・幼者・婦人等に逢いたるときは、道を譲り、又同行の際は、成るべく之を保護するよう注意すべし。
- ・葬儀ニ逢イタルトキハ其ノ柩ニ対シ敬意ヲ失フザルヨウ注意スベシ



◀『明治人の作法—躰けと嗜みの教科書』（文春新書709）  
横山 駿也 著  
定価 本体820円＋税